

昭和五十三年十一月十六日～十八日

稿本「続群書類從」展示目録

宮内 序 書
陵 部



應安三年六月十日於紅蓮寺金剛院

主写之

右熾盛充法日記以住吉社僧寂照院義性所藏
之手写ノ

文化十三年四月日

檢校保己一

ヲ知ラセニトマ精ヲキ足面・塗テ我身ヲ汚コ如
此承々君ニ宣奉ニト誓玉ヒシヨリ罪放サシテ異コヘ
ナケレハ今人多疾子ヲ愛シテ蝶芦神ノ惡キ行ロ逃
ト鬼シテ猛御神ノ奴トシテ印ヲ付真供アリ

右神祇拾遺一冊於梧川住吉社写之尤可
秘藏者也

文化十三年四月日

檢校保己一

稿保己一奥書（展示本七・六）

高麗王古夕里六二吉靈山御定。アリヤヒ人書寫。ムカヒト。丁度
又木ノタガシ。レニタガハ。御ニテミノ。第數多ノ。モル後リ。故
シタリ而書。ナニニ備テ。止御行。

癸未年三月七日良慶

吉皇之御定
草創以後雖不開之依勅令開之罪法
皇即本尊御拜見御十九和尚慈勝坊慶
兼為御先達參候佛前法皇與慶兼之外
餘人不奉拜本尊有其恐故如其時被石
問慶兼之一和尚某由上法皇有勅汝
可為長吏自今以後一和尚職可号長吏
云：為勅定之間慶兼以來一和尚号長
吏年額稱行事上代者以一和尚稱行事

嫡忠宝識語（展示本一二）

稿本「続群書類従」について

続群書類従は、正篇群書類従と同じく神祇部から雑部にいたる二五部に類従し一〇〇〇巻（正篇は五三〇巻）を予定した一大叢書であった。そのいわゆる中書本（展示本三等）の冊首に「検校保己一集」と注記されているように、正篇と同じく塙保己一により企画され、その編成に着手し、子忠宝・孫忠韶・曾孫忠雄と四代にわたって編纂事業が継続されたが、遂に完成を見るにいたらなかつた。

保己一は、正篇群書類従の開板が軌道に乗りはじめた寛政七、八年（一七九五、六）の交に、続群書類従の企画にかかつたといわれている。享和三年（一八〇三）一一月四日付の林大学頭（和学講談所の上部機構）宛の文書には、続類従目録の下書きが添えられ、文化一年（一八一四）には続類従の具体的開板計画と再調目録が林家に提出された。しかしながら、正篇開板も六〇〇冊をこえたとはいえ刊行中であり、続篇開板の費用までは調達できず、保己一生前には編成も完結せず、板行にも着手できなかつた。現在「古版目録」と通称されている続類従の版本目録二冊（展示本）の板行も、保己一の没後のことである。すなわち、保己一は文政四年（一八二二）九月七六歳をもつて没したが、男忠宝の相続年令またその諸手続等のため、翌五年まで喪を秘し、三月に保己一の名により正篇未献上分（一六九冊）等とともに、この続類従版本目録二冊を幕府に献上し、つづいて忠宝が九月正式に相続を許されるという過程を経ている（忠宝実年令一六歳、公表一八歳）。

忠宝は文政一〇年四月に続類従の校訂・清書についての目論見・見積り等の覚書を林家に提出し、天保三年（一八三二）にも幕府にその書写入用見積りを提出しているが、天保六年四月の林家宛口上書によれば、費用の調進も思うにまかせず編纂の進捗もはかばかしくなかつたようである。これに加えて、続類従編纂の中核であつた保己一高弟中山信名が天保七年に他界し、同一二年には正篇編纂の中心人物であつた屋代弘賢（保己一高弟）が没し、その藏書で続類従の資料源でもあつた不忍文庫本は、弘賢生前からの約束により蜂須賀藩阿波国文庫に吸収されてしまつた。このように障害はおお

かつたが、嘉永三年（一八五〇）七月幕府に對して、目録を添え続群書類從千卷の開板伺書を提出し、翌四年卷一〇七・卷四七〇・卷八八四の各一冊、補刻した總目録三冊、流用して卷九五四にあてた屋代弘賢校訂の『徒然草』（後に再び『閑居友』に改む）二冊、計七冊を開板して幕府に献上した。これらの開板本も見本程度であり世に流布するまでにいたらなかつたが、忠宝は不幸にも文久二年（一八六二）一二月、誤解により浪士の兎刃にたおれた。

忠宝のあとは長子忠韶が父祖の遺業をついだ。しかしながら続類從の集書・校合等のこととは、塙家に相ついで起つた不幸な出来事と、幕末期の騒然たる世情、やがて幕府の崩壊等により、ほぼ中絶の状態にあつたのである。忠韶は明治新政府に仕えたが、從来のよう塙家の史料編集ではなく、続類從の編纂に限られた。続類從の編纂台帳である現静嘉堂文庫藏「古版目録」（展示本）卷末注記によれば、明治九年（一八七六）一〇月調でなお二九九卷も不足していたことがわかる。しかしながら忠韶は、明治一〇年頃より塙家三代にわたって集書・書写・校訂された「稿本」（現書陵部蔵、函号四五三・二）をもとにして、加除訂正を加えつつ「淨書本」（現静嘉堂文庫藏）の作成に着手し、ほぼ明治一三年頃にその大要をおえた。恐らく、その後の集書・校訂等の費を得るためにあらうか、塙家三代の蓄積である「稿本」七八〇冊（侍講日記記載冊数）は明治一六年一月二六日宮内省侍講局に買上げられた。かくして塙家原本である続類從稿本は、侍講局文学掛備本となり、明治一九年二月侍講局廃止とともに他の藏書とともに図書寮（現書陵部）に引継がれた。

稿本「続群書類從」は、侍講日記には七八〇冊あるが七七六冊で、大正一五年に淨書本と思われる卷五七一・卷六二八・卷六三二（展示本四・一六・一七）三冊を加えて現在七七九冊。欠巻部はおおく、系図部（卷一〇六・卷一八八）・日記部（卷五二二・五三三）・鷹部（卷五四一・五五〇）の全巻を欠くほか、各部にわたって総じて二四四巻を欠いている。書誌の構成は展示により示したように、温故堂文庫在来本、保己一時代からの続類從のための収集本・書写収集本および中書本等からなるという特色を持つていて、なお、明治一九年頃までに東京府書籍館（現国立国会図書館）・内務省（内閣文庫）・修史局（史料編纂所）等へ献納された転写本の底本は、塙家の淨書本であつたと思われる。

(一) 目録類

一 続群書類從目録

版 一冊 (静嘉堂文庫蔵)

この目録は初版で、「古版目録」と通称されている静嘉堂文庫蔵本である。改訂版との相違はそう多くなく、代表的な所は、二六丁の巻一七八・一七九の部分で、展示本にある書入れ部分はそのまま改訂版の方に採用されている。表紙に「門外不出」と墨書きされ、塙家に於ける最終台帳の体裁をもつ書入れ目録であるが、使用されている印は用途不明のものが多い。家・乙亥・辰・朝・原有・塙・改済等の印があり、それらがどのような意味と役割を持つか明らかにされていない。(朝)の印が忠留である事が確認されている外は、家・○印等が、当部蔵本の表紙に貼付されている内容目次紙に使用されているものと同一のものである事が推定される程度である。巻末に「明治九年十月調式百九十九巻不足」とあるが、その具体的な内容は明らかにならない。重要なのは、所々に記されている注記や本の出入の注等で、巻九五四の『閑居友』が『徒然草』に直され、再び元に戻った事等が、この目録によって明らかになる。他にもこのような箇所が二、三ヶ所存在する。注記には『書写山日記』(巻八一六)の個所のように明細なものが多い。巻頭・巻尾に「可補入分」「可除分」としての書名注記があるが、前者中の注記には「黒川」「黒川藏」とあり、黒川春村藏書が用いられている事が知られる。元二冊本。印記に見るようすに塙家→内藤耻叟→松井簡治を経て静嘉堂文庫に蔵されたものである。

二 続群書類從目録

版 二冊

当部には続類從の目録が四部あり、うち、書入れのあるものは二部、本展示の続類從に括されているものと独立したもの(一〇三・四三)とで、この両本の書入れには大きな差異はない。目録は享和三年(一八〇三)一月下

書きが提出され、保己一没の一年後、文政五年（一八二二）三月献上されている。これが続類從の「古版目録」と通称されているものである。展示本は現行流布のもので、その改訂版に当り、忠宝時代の嘉永四年（一八五二）に版行されている。上下冊共表紙に分類名が直書きされ、内部の各巻名の上に朱の○印が付されている。これは当部に入った巻に付されたものと考えられ、△印は欠巻と思われるが、系図類は無印であり、不明の部分が多い。巻首に「温故堂文庫」印がある。他の一本（一〇三・四三）の方は、間々違いがあるがほぼその写しと思われ、他に不明の色切紙の小添付紙等が付されている。

三 和学講談所蔵書目録

明治写

二冊 (101・144)

「和学講談所蔵書目録」はかなりの写本が残されているが、内閣文庫等にある「和学講談所書籍目録」と題される九巻本を除けば二巻本である。静嘉堂文庫には、文政七年（一八二四）の河野豊光の写しがあり、この年次が確かにとすれば、本目録に記載されている「続群書類從九百五十三巻目録二卷」という巻数はこの時点に於ける続類從の規模と云う事になる。静嘉堂文庫蔵の一本には、かなりの書入れ、直し、追加があり、何度かの改修がなされている事が知られ、最も重要な伝本である。本目録の分類は、神祇に始まり雑類に終るもので、続類從の分類と良く類似している。他に「温古堂蔵書目録」と外題されている目録があるが、内題は「和学講談所蔵書目録」となつており、当「和学講談所蔵書目録」の一異本に過ぎない。

四 泰衡征伐物語

明治一二年
長野業通写

一冊 (卷五七一)

作者、成立不明。文治五年（一一八九）源頼朝の奥州征伐の経過を、「吾妻鏡」の関係記事より抜き出して叙述したもの。『将門純友東西軍記』に合綴。巻頭に「温故堂文庫」の印がある。本書は静嘉堂文庫蔵「古版目録」（展示本）には載せているが、同文庫蔵淨書本には欠けているものの一つで、書写奥書の形態は他の淨書本と共に通している。なお、展示本は大正一五年川田鷹氏の寄贈にかかるものである。

(奥書)

明治十二年九月六日 筆者長野業通
余書
同年九月十二日一校了 塙忠韶
同年九月内務省納清書 長野業通

対校

北川良忠

(二) 保己一関係

五 金剛抄

文化一三年
塙保己一奥書

一冊 (卷七七一)

大覺寺門跡性円法親王(一三四七薨)の命により、金剛院融円が門跡に関する規式を四二箇条にわたって列記した
一巻。展示本は、巻末に

右金剛抄、以日野中納言資愛卿本書写之

文化十三年丙子歳初夏上浣 檢校保己一

と保己一の奥書があり、底本が日野資愛の所蔵本であったことが分る。文化一三年(一八一六)の保己一上洛の時
のものであろう。日野資愛(一八四六没)は、保己一の歌道の師である資枝(一八〇一没)の孫で、文化一三年時
点の官位は從二位権中納言であった。なお、資愛の校合奥書のある『東宮冠礼部類記』(展示本三)がそのまま当
部藏続類從稿本とされている。

六 燐盛光法日記

文化一三年
塙保己一奥書

一冊 (卷七三四)

(参考) 静嘉堂文庫蔵淨書本

文化一五年
塙保己一奥書

一冊

密教修法の一、熾盛光法の嘉祥二年（八四九）～寛元三年（一二四五）間の記録集。文化一三年（一八一六）保己の一の奥書がある。ところが静嘉堂文庫蔵淨書本は同題でありながら、正安二年（一二〇〇）の記文で全くの異本、しかもこれは文化一五年の保己一の奥書のものである。淨書本はこのあと『六字河臨法記』一篇をもち、一方展示本はこれをもたず、『永仁年中北斗法記』『徳治二年北斗法記』の二篇を合冊するという、おなじ卷七三四としながら両者は別内容となっている。ちなみに静嘉堂文庫蔵「古版目録」（展示本）には「熾盛光法日記（今失）^朱、六字河臨法記 永仁年中北斗法記（今失）^朱」と四篇すべてが見え、その後の点検で淨書本の内容のみを確認している。保己一当時の諸本収集の状況と、その後の混乱を示す卷である。本冊巻頭に「和学講談所」印あり。

（奥書）

右熾盛光法日記、以住吉社僧寂照院義性所藏之本写之

文化十三年四月日 檢校保己一

（静嘉堂文庫蔵同書奥書）

文化十五年春二月 以南山法曼院藏本書写之

檢校保己一

七 神祇正宗

文化十三年
三月 塙保己一
奥書

一冊 (卷五八)

神祇に関する正実を記した書の意。京都神楽岡吉田社神主ト部氏が家伝をまとめたもの。著者にはト部兼名、息兼氏、同兼俱（一五一没）などの諸説がある。末に住吉社本を写した旨の文化一三年（一八一六）の保己一の奥書がある。本冊巻五八は〔惟賢比丘筆記（首に「温故堂文庫」印）〕、〔本書（首に「和学講談所」印）〕、〔神祇拾遺の三篇を合冊しており、〔〕の末にも保己一の同年同所の奥書がある。正篇刊行のかたわら、寛政七、八年（一七九

五、六)頃から続篇の構想をもちはじめ、文化一一年(一八一四)、林家に目録を提示して資金の借用を申し出ている。したがつて、続篇刊行のための収書の一端を示すものである。

(奥書)

右神祇正宗一冊、於摂州住吉社写之、尤可」秘藏者也

文化十三年四月日 檢校保己一

(神祇拾遺奥書)

右神祇拾遺一冊、於摂州住吉社写之、尤可」秘藏者也

文化十三年四月日 檢校保己一

八 入唐五家伝

文政二年中山信名写
塙保己一奥書

一冊 (卷一九三)

入唐した安祥寺惠運・禪林寺宗叙・小栗柄律師常曉・真如親王・靈巖寺円行の略伝記集一巻。成立は平安末期と見られている。展示本は、円行伝の前に

延文二年丁酉四月廿二日、於東寺西院「僧房、以隨心院御本書写了、文字」誤多、

遂可削直之
大法師賢宝生
廿五

同廿六日校合了

と賢宝(一三九八寂)書写本奥書を載せて いるが、全体の本奥書であろう。巻末には、

右入唐五家伝、東寺觀智院所藏延文古本也」文政二年丁巳潤月、令門人中山信名就本院写」之了

検校保己一

と保己一の奥書があり、展示本は、文政二年(一八一九)保己一が中山信名を供に上洛、叡山・東寺等の藏書を探訪した時のものであることが分る。中山信名(一七八七~一八三六)は、保己一の高弟の一人。正篇および殊に続

類從編纂の中心となった人物で、保己一の伝記『温故堂塙先生伝』の他、生國常陸関係の著書が多い。なお、その蔵書の多くが、続類從の底本として使われているが、『中山信名蔵書目録』一冊は東大史料編纂所に架蔵されている。展示本の所々に見られる朱筆校合書入れは忠宝の筆と思われる。巻頭「和学講談所」の印あり。

(三) 忠 宝 関 係

九 長弁私案抄 秋長弁作

文政一一年
塙忠宝奥書

一冊 (卷八三三)

室町初期、武藏国深大寺の僧長弁の作った諷誦文・願文等五六編を集めたもの。内題は「私案抄」とあり、のち作者の名を冠して「長弁私案抄」としたものであろう。展示本は雁皮紙四九枚、袋綴。表紙外題は「長弁私案抄 全」とあり、見返しに「和学講談所」の印がある。裏表紙見返しに忠宝のつまきの奥書がある。

右私案抄一冊、以中山信名蔵本 令謄写了

忠宝

中山信名蔵本とは現国立国会図書館に所蔵され、長弁自筆と伝えられているもので、展示本は破損の体裁まで写してある。

一〇 相馬義胤分限帳

文政一一年
塙忠宝写

一冊 (卷七一五)

陸奥中村藩主相馬義胤（一六五一没）の分限帳。内題には「相馬家士由緒書」とあるが、これは、四項目から成る本書の、最初の項目名に拠つたものである。展示本は、奥書に「右相馬家士由緒書一巻、以朽木家蔵本令謄写了」、于時文政十一年六月十日、「忠宝」とあり、本文とともに忠宝の筆である。続類從の稿本に忠宝校合本は数多くあるが、忠宝が自ら書寫した本は少ない。巻頭に「和学講談所」の印がある。

二 諏訪大明神絵詞

天保六年三月 西田忠礼校

一冊 (卷七三)

信州諏訪明神の縁起と祭を画いた絵巻の詞書。延文元年（一二五六）、諏訪社執行法眼円忠の発願により、当代一流の名筆家、絵師を揃えて製作され、光嚴院宸筆の外題、足利尊氏の奥書が附された豪華な絵巻であったが、絵は伝わらず、詞書のみ伝えられた。展示本は文明四年（一二七二）書写本の転写本。巻頭に「温故堂文庫」印がある。朱校が加えられ、墨付第七七丁の裏に、「以上、天保六年三月十日遂校正了、忠宝」、巻末に、「右諏訪大明神絵詞、天保六年三月十三日校正畢、西田忠礼・塙忠宝(花押)」の朱書がある。忠宝は、この年（一八三五）三月二〇日には、巻五七『北野宮寺縁起』の校正を太田弘資と、四月二三日には、『北野本地』の校正を西田忠礼と行っており、これらの奥書からこの期の仕事ぶりの一端が窺われる。なお、忠宝の花押は、巻六七七『笠懸射手体配記』等にもみられる。

三 書写山旧記

塙江戸末期写
忠宝校

一冊 (卷八一六)

後白河法皇（冒頭欠）・後醍醐天皇行幸記、橋本公夏宛三条西実隆書状、赤松家関係など、書写山円教寺に関する記文を集めたもの。本冊巻八一六は『播磨国書写山縁起』『書写山旧記』『峯相記』の三篇からなるが、表表紙貼付の目次には『書写山旧記』を除いた二篇しか書かれておらず、静嘉堂文庫蔵「古版目録」（展示本）も同様である。編成当初は、本記を『書写山縁起』の一部と考えていたものか。忠宝は、本冊『縁起』と『旧記』の間の余白に両書の並存を示し存疑を朱書している。「古版目録」巻八一六『縁起』脇にも関連する朱書があり、忠宝の校訂作業の様態が窺える。なお、静嘉堂文庫蔵淨書本などは『旧記』が除かれしており、続類從活字本には『縁起』『旧記』共に除かれ、拾遺部により補われた。

（『播磨国書写山縁起』識語）

忠宝云、古ク『統ノ』^{（記録）}目六ニ書写山旧記トアリ、サレハ書写山旧記ノコト歟、又古ク記録シシタルハ誤リニ
（采書）

テ、コノ縁起ヲノセル積リ歟、シハラク両書ヲココニ備フ、追而可考

『墨書き弘化丁未年三月七日夜一読了 忠宝』

〔古版目録〕卷八二六、書入

（参考）草稿（采書）ニハ記録トアリ、旧記ノ方ノ過去帳ヲ雜部ニ入、跡ヲ茲ニ載ル積歟、可考、シハラク縁起ト旧記ト二部ヲ元本ニ備フ

三 諸寺略記

承澄記

江戸末期写

一冊 (卷七六九)

（参考） 静嘉堂文庫藏淨書本 同明治二年長崎孝之写
三年稿忠韶校 一冊

諸寺の草創縁起・奇瑞等を集めて略記した一巻。記者の承澄（一二八三寂）は、その著『阿波縛鈔』二二八巻で有名であるが、本書は、その巻一〇〇「諸寺略記上」と内容的に合致する。展示本は、内扉に忠宝と思われる筆で「続類從中書諸寺略記」とあり、また巻頭に確定した巻次が朱筆で書き込まれていることから、忠宝による本文校訂がなされた結果の中書本であることが分る。巻頭「温故堂文庫」の印があり、巻末には、弘安二年（一二七九）正月二三日付の承澄の本奥書の他、正和四年（一二一五）・応永二年（一四〇四）・宝永八年（一七一二）の書写本奥書がある。続類從編纂事業において、展示本の次の段階を示すものと思われる淨書本（参考展示）は、上の本奥書のあと、

明治十二年十二月廿六日筆者 長崎孝之

（采書）同十三年一月八日一校了 稼忠韶

と長崎孝之の書写奥書および忠韶の校合奥書があり、さらに

同年一月内務省納清書 妻木頼徳

(朱書) 同十八年二月廿七日加一校了 小野由久

(朱書) 同十九年四月十八日一校了 修史館納

青山景通

とあつて、この淨書本から転写本が作られ、内務省・修史館へ納められたことが知られる。なお、修史館の後身東大史料編纂所蔵の続類從の『諸寺略記』巻末には、年次はないが、「筆者中島常 校合青山景通」とあり、一致する。

一四 権中納言定頼卿集

江戸末期写
堀忠宝識語

一冊 (巻四三〇)

中古三十六歌仙の一人藤原定頼（九九五～一〇四五）の家集。『定頼集』の現存諸本は、一、定家筆本系統（正篇巻二三六）と、二、明王院旧藏本系統（展示本）の二類に分けられる。展示本は、忠宝が、続類從の所収書目との確定にあたつて、正篇所収書目と同一書名の本書に注目し、両本を対校した結果、異本として続類從に所収することとした本文である。なお、忠宝は両本の共通歌八一首（内一首重複）に朱点を付している。今日の調査ではこの他に四一首が加えられる。

(表表紙見返忠宝識語)

忠宝云、此定頼卿集ハ正編ニノセシ集トハ異本ナリ、朱点ヲ「加ヘタル分ハ正篇ニ出タル歌ナリ、然レトモ一二ヲ引合セミタルノミ」ナレハ、猶ヨク引合セテ朱点等ヲ加フヘシ、歌数正篇ノヨリハ「此本余程多シ、目録ヘハ異本定頼卿集ト出スヘシ

(巻末貼紙)

(水本奥書)
京都興福寺明王院家藏本延宝庚申歲写

三 神樂血脉 以下

寛政一〇年 墓保己一奥書等

一冊 (卷五三三)

(参考)

静嘉堂文庫藏淨書本

明治二三年 北川良忠写
墓忠韶校

一冊

本冊卷五三三には、1 神樂血脉 2 和琴血脉 3 鳳笙事・相承事（題はなく、上記の二項目より成る） 4 郡曲相承次第 5 鳳笙師伝相承 6 築築師伝相承 7 権馬樂師伝相承 8 大家笛血脉の八篇を収載。内容は、それぞれの師資相承の系図。1~4、7には、寛政一〇年（一七九八）一月書写的保己一奥書があり、1、2、4~7は伏見宮本の転写本とみられる。本冊には、中書する際の注意を指示した忠宝の朱書きがみられ、表紙裏に、「忠宝云、此冊中相承類不用ノ類残入、郢曲相承次第ハ目六ト順タカヒテコ、ヘ綴コメリ、中書スル時ハ目六へ合セテ順ヲ立ヘシ」、5の題の脇に「宝云、下三丁相承不審、コノ冊中書ノ時ハ除ク方歟」、6の題の脇に「忠宝云、コ、ヨリ中書スヘシ」とある。静嘉堂文庫藏淨書本の卷五三三は、忠宝の注記通り、目録の順序に従い、4は6の後に入り、「不審」とされた5の部分は削除され、本冊の3の部分が「鳳笙師伝相承」の題名でよばれるようになっている。

すなわち淨書本の順は、1 2 3 6 4 7 8 で、七篇である。

四 忠韶關係

大村由己撰
明治五年 墓忠韶写

一冊 (卷五八九)

五六 太閤紀州発向記

天正一三年（一五八五）羽柴秀吉による紀州根来寺、雜賀衆征討記で、秀吉のお伽衆大村由己の撰したものである。卷末に「于時天正十一年吉辰」とあるのは、本書のものではなく、卷五八七『柴田退治記』に「于時天正十一月吉辰……」とあるのを、書寫の過程で混同したと思われる。展示本は明治五年一月三日忠韶が写したものである。『惟任退治記』『同四国発向記』『同任官記』の三部と合冊され、『惟任退治記』卷頭に「温故堂文

庫」の印があり、朱筆で「忠宝云、コノ四種ハ豊臣太閤六ヶ条雜記ノ申ヨリ出ス」との註記があり、本書の底本が知られる。静嘉堂文庫蔵「古版目録」および、展示本には「太閤紀州発向記」とあるが、内題には「紀州御発向之事」とあり、続類從活字本では内題がとられている。

七 瓦林政頼記

江戸末期写
明治一二年堀忠韶校合奥書

一冊 (巻五八一)

本書内容は二段に分れ、前段は応仁の乱から永正八年（一五一）の山城船岡山合戦まで、足利将軍家、細川管領家の内紛による争乱に、摂津国の武将瓦林政頼の武功を加えた合戦記。後段は政頼の近習松若丸が、主君と父の間にはさまり自刃するという戦国悲話である。成立については、文中「当御所様義植公」とか、細川高國のこと、「今ノ右京兆」とあるが、義尹が義植に改名したのは永正一〇年（一五二三）であり、そして義植が高國に追われて淡路に出奔して將軍職を退くのは大永元年（一五二二）であるので、その間に成立したと思われる。本書は、静嘉堂文庫蔵「古版目録」に入れられたが、「今矢」と註記され、それが朱引されていることから、最初ではなく、のち入手されたことがわかる。展示本は明治一二年忠韶が、前田家所蔵の古写本（現尊經閣文庫所蔵）によつて校合したものである。前田家本は「細川政元記」と合綴されており、展示本もそうである。展示本巻頭に「和学講談所」「温故堂文庫」の印がある。見返しに忠韶朱筆で「コノ書前田加州本、仮字書ナリ、土佐国下書状案文トアリ（細川政元記）をさす」、次ニ松若の物語トアリ、現名ハ何レニヨリテ名ツケシヤ、可考」とある。巻末の忠韶の奥書きは一度擦消して、つぎのようにある。

右以前田家所蔵古写本校合了、本書ハ平仮字にて」を以す、明治十二年一月廿一日 堀忠韶

八 仙道記

明治一二年
永井錦太郎写

一冊 (巻六二八)

天正年間（一五七三～九一）から慶長六年（一六〇一）蒲生秀行の会津入部に至るまでの、奥州仙道の各城主の次第及び当地方の戦乱を略記したもの。『那須記』に合綴。巻頭に「温故堂文庫」の印がある。静嘉堂文庫蔵の当該

本には奥書はないが、本書の書写奥書の形態は他の静嘉堂文庫蔵淨書本に共通している。なお、展示本は大正一五年川田鷹氏の寄贈にかかる。

(奥書)

明治十二年九月廿八日 筆者永井錦太郎

(余書) 同年十月十日 一校了 数原尚樹

(余書) 同月十三日再闕了 塙忠韜

同年十月内務省納清書 永井錦太郎

対校 檢閲 倉地寛裕

一五 最上義光物語

能勢慎吉写
明治一二年

一冊 (卷六三二)

出羽国山形の戦国大名最上義光（一六一四没）の事蹟を、最上家断絶後の寛永一年（一六三四）旧臣某が記したもの。もと上下二冊であつたのを一冊に合綴したもので、上下巻とも巻頭に「温故堂文庫」の印があり、書写奥書も同文である。展示本四・八と同じく大正一五年川田鷹氏の寄贈本で、書写奥書は淨書本に共通しているが、静嘉堂文庫蔵当該本は上巻々末にのみ「明治十八年九月三日 筆者鈴木重直」とある。

(奥書)

明治十二年十一月一日 筆者能勢慎吉

同年十二月廿一日一校了 数原尚樹

同十三年四月内務省納清書 能勢慎吉

(五) 編 築 関 係

二〇 海津城主次第

米山美波留写
（文化五年）

天文二二年（一五五三）築城時から、元和八年（一六二二）真田信之入城までの信州海津城々主の得替記。海津は慶長四年（一五九九）待城、また松城（代）と改称され、川中島の要衝である。卷末に慶長五年真田昌幸・幸村父子の高野入りの供をした士衆、慶長一九・元和元年大坂の陣で討死負傷した真田家の侍の交名があり、本書は真田家ゆかりの者が記したものと思われる。内題は「松城代々御城主」とある。展示本は本文共紙の表紙が付され、「海津城代々城主」の外題がある。奥書は

右一冊、以信濃国埴郡松代米山蕃照本書写畢、于時

文化五戊辰年春正月米山美波留

とあり、地元松代の米山蕃照所有の本を、文化五年（一八〇八）米山美波留が書写したものである。米山美波留は現在の所確証はないが、保己一の弟子の長野美波留と同一人物であろうか。

二 筒懸聞書 江戸期写

一冊 （巻六・七七）

（参考） 筒掛聞書 江戸期写

笠懸についての故実書。本書は、本奥書に「右一帖此度仍御懇望免伝写候畢、伊勢万助、寛政四年壬子九月十日

（花押影） 松岡平次郎殿參

文化七年四月十四日松岡次郎太郎行義」とあり、これにより、本書が、寛政四年（一七九二）伊勢万助貞春から、松岡平次郎辰方に伝授されたものであることが知られる。最末の文化七年（一八

一〇）奥書は、参考展示した辰方の相伝本に、その子行義が書き入れを加えた時のもので、松岡家にあつた底本が

書写された際に、そのまま写されたものである。なお、松岡辰方（一八四〇没）は、武家有職故実家として名高い伊勢貞春の高弟であり、また保己一の門人でもあった。その関係からか、正統類從の故実関係書には、貞春の藏書に負つたものが非常に多い。

三 尊快親王御灌頂記

文化九年
秋真超写

内題は「入道親王尊快御灌頂事」。後鳥羽天皇第七皇子尊快親王が、承久二年（一二二〇）二月、淨金剛院において伝法灌頂を受けられた時の記録。展示本は、卷末に「文化九年壬申秋八月、以当院藏本令書写之。台巖法曼院大僧都真超」との書写奥書がある。続類從稿本のうちの天台関係書には、比叡山無動寺谷法曼院真超書写本が数多く見うけられ、この方面的集書活動に、真超が何らかの形で関与していたことを窺わせる。

三 弘伝略頌抄

寛政六年秋曇如写
屋代弘賢識語

鎌倉時代初期の弘法大師伝。文暦元年（一二三四）正智院道範著。展示本は、寛政六年（一七九四）二月大和長岳寺普賢院曇如の書写本で、卷末に「余嘗遇普賢院索広伝、今茲贈此一卷、來開面視之非広伝、卷首以引広伝誤之乎、此是略頌耳、同年夏、源弘賢識」と、屋代弘賢の識語が加えられている。弘賢は、寛政四年、柴野栗山（寛政三博士の一人）について、吉寺文書等書写のため京都・奈良に赴いており、その折に『弘法大師広伝』をもとめたものであろう。しかし、寛政六年に曇如から贈られた本書は、広伝ではなく、その略頌抄であったわけである。卷頭に「和学講談所」「温故堂文庫」の印がある。なお、屋代弘賢（一七五八—一八四一）は早くからの保己一の有力な門人で、寛政五年に開設された和学講談所の中心人物の一人でもあった。上野不忍池の畔に住し、その藏書は五万巻を数え「不忍文庫」と称した。弘賢の豊かな学識と膨大な藏書は、正・続類從の編纂の上で大きな役割を果たしていた。

一 冊 （巻七四七）

一 冊 （巻二一〇）

二 弘法大師広伝

寛政一(二)年
屋代弘賢校

一冊 (卷二〇九)

平安時代末成立の弘法大師伝。著者三密房聖賢（一一四七寂）。展示本は、寛政七年（一七九五）、高野山正智院の僧覺道が書写、校合した本を、朱・墨・覺道の凡例にいたるまで、そのまま書写し、屋代弘賢が校合を加えたもの。弘賢が本書を求めて南都まで赴いたことは、展示本『弘伝略頌抄』の奥書により知られる。なお、本書書名は、静嘉堂文庫蔵「古版目録」、本書表紙貼付目次共に「弘法大師広伝聖賢」としているが、本書内題は「高野大師御広伝」とある。巻頭に「和学講談所」「温故堂文庫」印あり。

(卷末奥書)

右大師御広伝上下二巻、借野山正智院藏本書写以同所某院失名清淨心院藏本校合 寛政十二年月日

源 弘賢

(六) 諸家伝來本

三

前大納言為広卿詠草

元禄二年写

一冊 (卷四三四)

室町期歌人、冷泉為広（一五六六没）の永正元（一五〇四）、二、三、二三年の詠草。為広は、永正頃は將軍義澄の信任を受け、歌壇の指導者の立場にあつた。極官權大納言、永正五年出家。展示本は、為広自筆本から書写したとする本奥書の後に、「右二条為広卿詠草毫冊 元禄己巳歲、以板垣宗惣所伝借書肆林白水本写、彰考館識」といいう元禄二年（一六八九）の書写奥書がある彰考館本で、巻初右隅に「楓樹」の長方朱印がある。保己一は、天明五年（一七八五）以降、水戸家の知遇を得、彰考館藏本の利用の機会も得たようで、続類從本には、他にも、彰考館本を写したもの（巻三一七『類聚句題抄』）や、彰考館總裁を勤めた佐々宗淳、大串元善の本奥書のあるもの（展

示本三・モ) 等、彰考館との係りを示す諸本がある。

二六

大雲寺縁起

江戸末期写
佐々宗淳本奥書

京都岩倉大雲寺の縁起。天正一七年(一五九〇) 賢慶編。末に「右大雲寺縁起壱冊、元禄壬申之冬、佐々宗淳獲之京師写」とある。佐々宗淳、通称介三郎、字子朴、号十竹。はじめ出家し、のち還俗して儒道を学び、徳川光圀に認められ、元禄元年(一六八八) 彰考館総裁となる。全国を遍歴収書に勤め、同一一年五九歳で没した。保己一は『大日本史』の校定に従事するなど水戸藩の修史事業に協力しているため、同藩の蔵書の転写の便を得たのである。

二七

二尊院縁起

江戸末期写
大串元善本奥書

一冊 (卷七九〇)

京都嵯峨二尊院の縁起。原本は狩野元信画、貞敦親王、三条西公条筆の絵詞であったが、本書はその詞書部のみの写本。末に「三尊院縁起 右元禄乙亥^季以本院所蔵副本写之 大串元善奉命」とあり、徳川光圀の命によつて元善が二尊院藏の副本から転写したものを底本としている。大串元善、通称平五郎、字子平、号雪蘭。光圀に仕え、元禄四年(一六九一)『彰考館総目』を編し、同九年佐々宗淳について彰考館総裁となり、同年一二月、三九歳で没した。本書もまた保己一と水戸家との縁故により、塙家の収書の底本対象となつたものである。

二八

撰集抄

寛文八年一月
里村昌純写

三冊 (卷九五三)

広本と略本があり、展示本は九巻三冊本、即ち広本に属する。内容は巻一(八話)、二(八)、三(九)、四(八)、五(一五)、六(一四)、七(一五)、八(三三)、九(一一)で、説話順等は異なるが、諸本の内容上の差はない。広本先出とするのが通説である。昌純は享保七年(一七二二)一二月八日七四歳で没。内扉に破損した題簽が付されているが、原表紙に付されていたものであろう。続類從活字本所収のものは全く別本(広本)で、天正一七年

(一五八九) 写の転写本である。

(巻末奥書)

寛文八年十一月上二鳥書寫之

冒純方照印
「村純之印」

各冊巻頭に「和学講談所」の印、下冊のみ「温故堂文庫」との両印を有する。

三九

二所太神宮禰宜転補次第

寛文一二年
度会貞秀写

一冊

(巻九二)

伊勢内宮、外宮二所の禰宜の補任。内題は「二所太神宮正貞禰宜転補次第記」とする。末に「壬時寛文十二年七月中旬、以權神主弘基本書写焉畢 度会權神主貞秀(花押)」とあり、貞秀の書写本である。『二門氏人系図外宮』によれば、常行の流、常広の息に貞秀(槍垣)一禰宜が見える。また、冒頭「和学講談所」印以前に三種の所蔵印があり、その一に「波伯部百樹藏」が知られる。上田百樹、姓波伯部、名藤介、俗称鍵屋、京都の人、本居宣長の高弟として著名であり、『大祓詞後糸余考』(文化七年)の著書がある。

四〇

勸修寺長吏次第

江戸末期写

一冊

(巻九七)

京都山科勸修寺長吏の補任次第。初代長吏済高から三二代尊孝法親王享保一〇年(一七三五)までの次第が記されている。巻末に「享保庚戌中秋十六日書写遂校合以朱加補之、重而可清書也、速水房(花押影)」と本奥書があり、展示本の底本が享保一五年八月速水房常が書写した本であることがわかる。速水房常(一七六九没)は京都の有職故実研究家で、続類從稿本には房常の蔵書に負つたものが少なくない。巻頭に「和学講談所」「温故堂文庫」の印がある。

三 さのゝわたり

江戸初期写
小山田与清校

一冊 (卷五三四)

本書は連歌師宗碩の伊勢紀行である。「臘庫」の蔵書印が巻頭にある。即ち、内藤風虎（義泰）旧蔵本で、現在の所、この叢書の中では三本が知られている。巻末に「万年橋南散人円斎画鏡藏書」の印があるが、これは旧所有者であるのか「臘庫」印と対になるものか明らかでない。江戸初期の写と推定される本文の所々に、異本校合、貼紙による校合が付されている。最末に薄様一紙の添紙が付され、小山田与清の校合覚え書きと「さのゝわたり」と云う書名の由緒が記されている。与清は天明三年（一七八三）生、弘化四年（一八四七）六五歳にて没。その息、清年は文政七年（一八二四）八月病死している。『さのゝわたり』には、文政七年開版の木版本があり、跋によると、その年の三月、清年が架藏の「ひとまき」をもとにして鹿島明神の文庫本、『神風行囊抄』引用文等で校合しているが、その校合本は本書のものと同一である。ただ、両書を比較して見ると、底本は全く別であったと推定される。

三 十三代要略下

文化四年
日野資矩写

一冊 (卷八五四下)

村上天皇から崇徳天皇まで「三代の年代記」。『皇年代記』ともいう。展示本は、上下二巻より成るうちの下巻で、後冷泉天皇より始まる。巻頭に「此一巻、在柳原家其名未知云々 反古之裏書之、尤殊勝之巻物也、得許借令筆写、追可清書、文化四年五月、資矩」とあり、最末に「右皇年代記残欠、日野家秘本也、資矩卿自写賜之、保己一」との識語が見えている。これにより、文化四年（一八〇七）に日野資矩が書写したものを保己一が得たことが分る。おそらく、保己一が文化六年五月に上洛した際に入手したものであろう。日野資矩（一八三〇没）は、保己一の歌道の師である資矩の子で、資愛の父である。ちなみに文化四年当時は、前権大納言正一位であった（展示本五・三参照）。なお、本書の上巻は、内扉に「皇代記残闕 白川家」、巻末に「右皇年代記残欠、以白川侯秘本書写畢」とあり、塙家において、上・下巻が合わされたものである。とともに巻頭に「和学講談所」「温故堂文庫」の印があ

る。

三 東宮冠礼部類記

江戸末期写
日野資愛校

一冊 (卷二九三)

憲平（冷泉天皇）・尊仁（後三条天皇）・守仁（三条天皇）三親王の御元服について、同時代の記録を類聚したも。内題は「東宮御元服部類」とあり、憲平・尊仁・兩親王記の末に各元禄二年（一六九九）の野宮定基の本奥書をもち、憲平親王記本奥書のあとに「以柳原家本校了 資愛」と日野資愛の校合奥書がある。資愛はこの他「以上一枚以今出川家本加入」（尊仁親王記首）、「資愛按、以下四紙重出、可除歟」（同上文中）、「右永承久寿等記、以今出川家本校了 資愛」「以今出川家本加之、已下切一枚右之巻ニ副」（守仁親王記末）などと書入れており、本冊全体を補訂している。資愛については展示本五を参照されたい。なお、本奥書により、本書は東園大納言基量の本を転写していることが知られるが、続類從公事部は、基量本→定功（→広幡長忠）書写本の系統が多く見られる。巻首に「和学講談所」印あり。

四 師遠年中行事 江戸末期写

一冊 (卷二五一)

参考 年中行事 鎌倉期写

一冊 (四五・三)

宮中恒例の行事を、日を追つて摘記したもの。「年中行事御障子文」（巻二四八）の異本ともいわれ、関連が深い。大外記中原師遠所持本がもととなつたため掲出の書名でよばれるが、師遠（一一三〇没）が作者ではない。展示本は、永正六年（一五〇九）持明院基春書写本を骨子として、同九年中御門宣秀の附加があり、寛政二年（一七九〇）藤貞幹の本奥書、そのあとに高橋（紀）宗直（一七八五没、八三歳）の関連書の抜書を添えている。巻首に「和学講談所」「温故堂文庫」の印あり。当部には別に基春書写本の祖本、仁安三年（一一六八）良嚴本に近い善写本があるので参考のために展示した。両本を対比することによって、類従本の本文的性格を知る上で貴重なものとなる。

(参考) 中外抄 宝永三年写 一冊 (鷲・四七)

知足院関白藤原忠実（一一六二没）の談話を中原師元（一一七五没）が筆録したもの。公事部に編入されているが、『江談抄』（正篇）、『富家語』（続篇）などと同種の雑部に入るのが正しい編成と思われる。展示本は首部および下巻部を欠く建保二年（一二一四）書写本を祖本とし、最末に天明元年（一七八一）の左衛門大尉藤常成の本奥書をもつ。ところが、この常成の前に「宝永三年（一七〇六）八月日以三条西本摸写了、従一位（花押）」と見え、この書に該当する本が当部鷲司家旧蔵本に存する。展示本には貼紙による校合が加えられており、両書はほとんど一致する。続類従本校定の正確さを示すものか。巻初に「温故堂文庫」「和学講談所」の印あり。なお、尊経閣文庫蔵の「久安仁平間記」と題する建暦二年（一二二二）業信奥書本一巻が、本書下巻に相当することは現在周知のことであるが（昭和九年コロタイプ刊）、続類従編纂時には不明であったのである。

(七) 古 写 本

三 応仁乱消息

大永三年写

一冊 (卷五七八)

書出しに「今度就一乱可入字凡注侍也」とあるように、応仁の乱について、消息体で関係語句を記述したものである。文体は和様漢文体で、相當みだれたものである。表紙はなく、一一紙、紙釘装。尾紙裏につぎの本奥書・書写奥書がある。

文明十八年丙午八月日 主小入丸
応仁記 一札

大永三年己未潤三月十四日書之 悪筆比興々々

大永三年の干支は、癸未であり己未ではなく、同音で癸と己を誤ったのであろうか。現在は『長祿記』と合冊され、間に白紙が入れられ、塙家の手により「古本応仁記 称応仁私記 (卷) 応仁乱消息」と記されている。以上により、本書は文明一八年（一四八六）八月以前に成立し、小入丸所持本をもつて大永三年（一五二三）に書写されたものである。書名は「応仁記」といわれていたものであるが、正篇合戦部に同名のものがあるので、塙家によつて「応仁乱消息」とつけられたものと思われる。

三七 庭訓往来 大永六年写

一冊 (卷三六一)

卷頭に「庭訓往来 賢恵法印御作者」とあり、卷末に「庭訓往来 文主□」(削消した上に新たに「光真」とある)右筆□(削消) 大永六年丙戌五月日」とあって、その奥に「右此庭訓、大永六年丙戌五月日与有之、考年數者、享保七年壬寅八月迄都合百九拾七年成者也、自先年当寺有之者也、新福院光胤卅七歳」と誌されている。写本の文字がかなり薄れている上を、後代にこれをなぞる等の添筆もみとめられる。本文は、誤脱や異様なくすし字様を伴つており、また物名を列挙してゆく箇所で、省略改変を試みている。フリガナは、本文の字形よりも古意を存するが、全体的には、復古に固執せず同時代の常識に従つて書写されているところに、むしろその個性を認めるべきである。

三八 日下一木

穎瑞果作

室町期写

一冊 (卷三四一)

五山詩僧の一人旭峯瑞果（一五二八寂）の漢詩集一巻。弟子の東樵瑞佐（一五二七寂）の序と永正一七年（一五二〇）七月付跋がある。展示本は、本書成立時点より余り隔らない頃の写と思われる。料紙は楮紙三九枚で、全張縫ぎ貼りして、巾広の本に仕立てている。表紙は、後表紙共原表紙で、内扉には「日下一木日下一木之字、果字也」とあり、本書名が瑞果の「果」に由来すること、本書の成立が「庚辰年」即ち永正一七年であることが注されてい

る。卷頭に「和学講談所」の印ほかがある。

三
晦庵稿 駿以篤作 室町期写

一冊 (卷八三二)

東福・天竜寺などを歴住し、南禅寺第一五六世となつた信仲以篤（一四五一年）の疏文七二篇を集めた一巻。展示本は、室町中期頃の写と見られるが、卷頭に添えられている山門・諸山・道旧・江湖などの種別目録二紙は、紙質も筆蹟も異なり、やや時代が下るものである。本文は、楮紙二一枚で、兎明な朱注が加えられており、また各疏題上に朱筆で「山」「諸」と疏文種別が注されている。なお、表紙の見返しに桧山垣齋が本書を鑑定した切紙一紙が附されており、「晦庵藁一巻 篤信仲ト下モニ名ヲ題ス、是作者トミヘタリ、此信仲ハ、五山ノ中ニモ名アル僧ニテ、信仲ハ道号、名ハ以篤ト云リ、東福寺百卅世ニテ、宝徳三年十月一日遷化ス、晦庵ト称セシコト所見ナシトイヘトモ、別号ナルヘシ、此書ニ出ル所ノ疏文年月ヲ記セサレトモ、永享ノ比ヨリ文正ノ頃マテノ作ト相見エ候桧山垣齋考」とある。

四〇 飛月集 室町末期写

一冊 (卷三七三)

静嘉堂文庫蔵「古版目録」（展示本）に、「東坊城中納言長淳卿筆」と注記されている。本書第一紙袋中にも江戸期の筆になる同内容の書付がある。卷頭の藏書印により、勧修寺家旧藏本と知られる。正中二年（一二三二年）當時の和歌宗匠二条為世（一二三八没）が臨席して行なわれた鷗家祠官を中心とした月次歌会四ヶ度（七月～十月）の詠草二一七首を收める。なお、表表紙見返し端に、本文と同筆で

柳無氣力条先動 池有波文水尽開

春たつといふばかりにやよしのなる 山もかすみて今朝はみゆらん
林中花錦時開落 天外遊糸式有無
はるは先我にてしりぬ花さかり

と『和漢朗詠集』の詞句が書かれている。また、卷末本文裏面より裏表紙見返しにかけて、江戸初期筆で、十首和歌三種（定家家隆等）が収められている。

四一 類字源語抄 室町末期写

一冊 (卷五十七)

源氏物語の難辞を、いろは分けにして註釈を加えた辞書。後村上天皇皇子師成親王（法名三源惠梵）が、永享三年（一四三二）に、旧本の錯乱を整理書きし相伝した旨の本奥書がある。吉野朝廷では源氏物語研究が盛んで、本書に先行して、長慶天皇御撰の『仙源抄』もあり、そうした伝承を親王が集成された書とみられる。しかし展示本は、文明四年（一四七二）一条兼良著の『花鳥余情』を引く箇所もあり、後世の加筆があると考えられる。展示本後半には、文明一年法眼紹永が、『仙源抄』にあって本書にない項目を抄出したものが載る。本奥書は、「以伝々写本書之間、不審等繁多、追加校合可置也」、明応庚申仲商上澣終書功、明応九年（一五〇〇）である。卷初に、墨で消され読み難いが、「円融藏」の長方朱印、「盛胤之印」の方朱印が捺された梶井宮相伝本であることが知られる。「和学講談所」印あり。

四二 佐竹宗三聞書 佐竹光家著 室町末期写

一冊 (卷六六九)

室町時代の弓の作法の書。一巻。書名は、朱書きで冒頭に新加されたものによっており、これは奥書の「右条々從佐竹宗三相伝申聞書如斯（後略）」とあるのによつたものか。印記がなく、卷末の奥書部分が切除されている。この種の書物が多くそうであるように記事に重複はあるても、詳記された武家故実書であり、弓技に関する中世の儀礼・故実を中心には、中世人の民俗・生活・価値観等を豊富に伝えている。ほぼ二〇〇項ほどの一つ書きを連ねている。文末に「永正弐年十二月日康理在判」とあり、『国書解題』によると「年」の次に「乙丑」という干支があるべきであり本書には欠けているが、武家関係の古写としては丹念なものというべきであろう。続類從活字本によつて永正弐年が「永正十二年」と紹介されているのは、誤りである。

四三 延寿類要 竹田昭慶著 室町末期写

一冊 (卷九〇一)

養生の書。一巻。首尾に書名があり、跋文によると「未だ病まざるの病を治することを目的として編次されたものである。『素門經』から二章引いて序とし、ついで「養性調氣」「行壯修用」「行壯製禁」「服食用捨」「房中損益」の諸篇を織っているが、量的な中心は「服食用捨」にある。全体に朱訓点を存し、また朱線・朱点が施されている。跋末に「時康正子夏五念六日法橋昭慶謹選」とあるが、写はそれほど古くはなく、室町末期の校合写本とするべきか。精写であるが、水損にあつていている。「和学講談所」の印がある。

四四

喫茶雜話

元和六年
茶竹子著

原本

一冊 (卷五七〇)

茶書。一巻。巻末奥書の終りに「元和第六暮秋日、茶竹子誌焉(印)」とあり、裏表紙見返しに「右文政十二(うちのと正月十四日一読了、この本元本とみゆ、不及比校清書すへし、名等に解かたきあり、喫茶を好める博学者に問へし」という忠宝の朱識語がある。巻首に「和学講談所」の印が捺されている。続類從が、善本はそのまま採用した経緯が示されている。一つ書きの箇々の記事内容は諸書と出入するが、そのことも含めて元和時点におけるこの方面での知識連合のあり方が示されていて貴重である。総体に、個性的な達筆で誌されており、訓みが克明にふられ、まま語釈が附記され、朱筆で句讀されている。巻頭の旧印記は塗抹されている。

四五

寺門高僧記

江戸初期写

一冊 (卷八一二)

鎌倉末期成立と見られる園城寺の高僧伝記集。もと一〇巻本であつたが、早くより巻五・七・九を欠く。展示本は、巻一〇のみの残欠本であるが、静嘉堂文庫蔵「古版目録」(展示本)にも、「天智天皇ノ御時ヨリ二条院迄アリ、巻首ニ巻十トアレハ、十巻アリタリト見、サレハ残欠ナリ」と忠宝の注記が見える。巻頭に「和学講談所」の印、巻末には

于時慶長九年甲辰年十二月廿三日

高僧記ノ分新羅神主以自筆本、写之者也

時能 行年六十七

明治九年九、一読過了
(花押)

と、慶長九年（一六〇四）の時能の本奥書および明治九年の忠韶の一読奥書がある。なお、続類従活字本は、宝永七年（一七一〇）の志晃書写本に拠って、卷一・四・六を収録している。

四六 寒川入道筆記

江戸初期写

一冊
(卷九五九)

文学関係雑記。不分巻。展示本は、「温故堂文庫」の印がある「貞徳翁乃記」一冊に含綴されていて、印記も書名もない。書名は、続類従の編成に当つて巻頭に小さく「寒川入道筆記」と誌した朱書が採用されたものである。『大日本歌書綜覽』は、貞徳著寒川入道写とする。本文中「当年」と書かれている記事の内容が慶長一八年（一六一三）があるので、これを成立の時期とみるべきか。「歌連歌同詩聯句之事」、「恩癡文盲者曰状之事」、「落書附説譜之事」、「謎説之事」の四部が合せられたものとみるべきであり、連歌・俳諧文学の関連事項が列記されている。朱点ならびに朱筆の注記がある。

八 古 版 本

四七 旱 霖 集
枳祖応著

応永二九年版

二冊
(卷三三四)

南北朝時代の詩文集。不分巻。作者は、応安七年（一三七四）に寂した東福寺の僧であつて、岐陽方秀以下数多く

の詩僧を門弟とした。大智円応禪師の勅謚号がある。『旱霖集』は、その示寂から四八年目の応永二九年（一四二二）に、門人の一人である大岳周崇の序跋を得て公刊された。詩体文體の多様さにその文才をみる。続類從本は、『旱霖集』の直前に通量編『大智円応禪師夢巖和尚住慧日山東福寺語錄』全三三丁を合綴し、かつこの独立性を無視して『旱霖集』二冊と認定しているが、現在の巻頭にある「宝勝院」という旧藏印の位置は、巻頭印としてはふさわしくないので、もともとの巻頭であったとは考え難い。両者ともに丁附は一連でなく、しばしば丁附を改めて巻末に至り、本文の末尾に「旱霖集終」とあって、その後に「応永壬寅仏生日前南禪周崇謹書」とある跋を附する。「和学講談所」の他に、「宝勝院」「□宗」の印がある。

四八 中山寺縁起 中山寺版

一冊 (卷八〇一)

聖徳太子開創の中山寺（現兵庫県宝塚市）の仮名縁起。原表紙はないが、内題に「摂州河辺郡紫雲山中山寺由來記」とある。本書の成立は、内容が慶長八年（一六〇三）の豊臣秀頼による再興着手までで了つてることから、ほぼその頃と考えられている。展示本は、成立と余り隔たらない時期に中山寺で刊行された版本そのもので、巻末に「中山寺」の寺印と、住持名「興起」の方印が摺込まれている。諸堂再興の勧進のために開板されたものである。

四九 康頤宝物集 古活字版

三冊 (卷九五二)

平康頤が著したと伝えられる法談集。本書は当部藏伝自筆一巻本をはじめ、二巻本、三巻本、六巻本、七巻本、九巻本など多くの異本が知られている。展示本は片仮名三巻本系で、原装本。刊記はないが、川瀬一馬氏が大屋徳城氏藏本に「慶長十四年菊月中旬求之、西南院秀弁」の墨書き語があるところから、慶長一四年（一六〇九）九月以前刊行とされた（『古活字版の研究』）ものと同版である。『宝物集』諸本の位置付で、続類從本は写本の扱をうけているが、これは展示本を筆写した静嘉堂文庫藏淨書本などによったためである。各冊巻頭に「和学講談所」の印

あり。

三〇 戴恩記 松永貞徳著

天和二版

一冊 〔卷九五八〕

松永貞徳の隨筆的歌学書。二巻。「貞徳翁戴恩記」「歌林雜話集」という一名も行われている。版本は、貞徳没後二九年目の天和二年（一六八三）に、孫昌易の序跋を付して刊行された。続類從本が採用したのは、この版本であり、現装では、上下合せて仮綴されており、上下各巻の巻首右下に「和学講談所」の印がある。本文は、仮名交り文で、版式は、毎半葉九行、毎行ほぼ一九字詰である。末尾の刊記に「天和二年戊正月吉旦 洛陽永田長兵衛」とある。天和の版の他に元禄一五年版と無刊記の版が行われていた。当部には、続類從本の外に、元禄一年の竹翁斎貞佐の写本がある。

九 見集形態

五一

心敬僧都百首 江戸末期影写

一冊 〔卷三九七〕

成立年時は、文明二年（一四七〇）説と三年説がある。正徹一三四忌の為の詠で、春一五首、夏一〇首、秋一五首、冬一〇首、恋一〇首、旅九首、述懷一〇首、無常一〇首、釈教一〇首から成る。巻末に「奉迎清岩和尚十三廻忌辰、為翻年来之恩波、漫仏涙禿筆、從狂歌百首、三箇日之間綴之、咄愚案庵云、所志之至不伺何、皆々実相頗悟菩提直路、文明第二天麿賓九日、權大僧都^敬」とあり、その後に散らし書きの歌一首を添えている。正徹の一三四忌は文明三年に当るが、文化元年（一八〇四）、心敬自筆本を書きした旨の識語がある内閣文庫本以外は、心敬自筆本（弘文荘書目）も、当本も文明二年になつてゐる。跋によれば五月七日によみ始め、九日の忌日には詠み終えているが、文明二年か三年かで、詠出場所は異つて来る。前者ならば関東北部で、後者ならば武藏の品河付近で詠

まれた事になる。巻頭に琴山の極めを持ち、摸写態度は忠実なようである。無印記本。

三 閑吟集 江戸初期影写

一冊 (卷五六二)

臨写本で、同様の形態、書写様式を有する志田延義氏蔵阿波国文庫旧蔵本の存在から、底本も袋綴の、同形態の本と推定される。底本は集の成立から一〇年目の大永八年（一五二八）の奥書を有する本であるが、同一祖本からの写しでは、上記二書の摸写本以外に水戸彰考館に小山田与清が種々校注を加え、天保三年（一八三二）六月謄写した一本が存する。系統上比較的当本に近く、八三番の肩書と共に「廊」（阿波国文庫本は「小」）としている。他に続類從写本として内閣文庫・静嘉堂文庫にも蔵しているが、共に真名序を欠いている。無印記本。

（底本奥書）

雖其斟酌多候、難去被仰」候間、惡筆を措置、如本書写了、「御一見之已後者、可有入火候也、」比興云々、

大永八年戊子卯月仲旬書之

四 東大寺八幡転害会記 江戸末期摸写

一冊 (卷六四)

文明一四年（一四八二）に描かれた転害会の行列図。もと二巻本。展示本は、巻末に「貞享元年甲子十一月廿六日畫写畢、繪師富田氏、筆者陳秀和、校合畢」と書写本奥書があり、白描で行列図まで忠実に写している。静嘉堂文庫蔵、続類從淨書本およびその転写本である東大史料編纂所蔵本・国会図書館蔵本・内閣文庫蔵本等は、全て「絵図アリ略ス」として行列図を写していないので、展示本の存在は貴重である。なお、第一巻巻頭に「文明拾四年壬午八月十三日書之」と本奥書が見え、逆に巻末に「八幡宮手搔会 行列之次第」左ノ巻第一」という原外題があり、次いで第二巻の原外題「八幡宮手搔会 右ノ巻第二」と続いているところから、第一巻は首尾逆に写されていることが分かる。この錯誤が、貞享写本で行われたか、展示本で行われたかは判然としない。巻頭「和学講談所」の印あり。

春に行われる諸国国司の任官決定について、藏人の作法を中心とした次第。作者に一条冬良（一五一四没）が考えられている。展示本は折本の冒頭を包紙に貼付た形をとつており、包紙の表に書名、「続二百六十三ノ上」などを書き、稿本としてそのまま使用している。なお、この巻二六三は下として『後陽成院県召除目次第』一冊があり、両書を紙袋に収めており、続類從稿本のなかで珍しい形をとつている。両書とともに巻首に「和学講談所」印あり。

五

山名家犬追物記

文政一一年
稿忠宝写

一冊二卷

(卷六七三)

山名家伝来の犬追物の故実書。室町期山名政豊（宗全の孫）の作。内題には「篠葉集」とあり、この名は山名家の家紋に由来する。展示本は、巻末に朱で「右一巻山名家秘藏之巻本ヲ以書寫校合了、于時文政十一子のとし十月十日、稿忠宝」とある。『寛政重修諸家譜』によれば、享保一四年（一七二九）山名豊就が、先祖政豊より伝來の犬追物の書を將軍吉宗に獻じており、展示本の底本はこれと同本であろう。本書には、本文絵図を彩色した絵図二巻が別に添えられているが、続類從の稿本で、巻子形態をとるものは他に無く、その意味で珍しい例に属する。



